成長する有機体としての詩
――バイスナーとシュトゥットガルト版

大田浩司

0．はじめに

フリードリヒ・バイスナー（Friedrich Beißner, 1905-1977）の編集によるシュトゥットガルト版（*die Große Stuttgarter Ausgabe* 略称StA, 1943-1985）は、それまでに出版されてきたヘルダーリンの全集がどれも史的批判版（historisch- kritische Ausgabe）として学術的に不十分な質しか備えていないとの考えのもと、ヘルダーリンの史的批判版の決定版となることを意図して編集された[1]。シュトゥットガルト版はテクストの生成を明晰に再構成し、読者に分かりやすく提示することを編集の核心ととらえ、ヘルダーリンのみならずあらゆる文学の史的批判版の模範とされてきた[2]。

シュトゥットガルト版全集は全8巻、15分冊によって構成されている。文学テクスト、論文、翻訳はバイスナーによって編集され、1943年に第1巻（1800年までの詩）、1951年に第2巻（1800年以降の詩）、1952年に第5巻（翻訳）、1957年に第3巻（『ヒュペーリオン』）、1961年に第4巻（『エンペドクレスの死』、翻訳）が刊行された。書簡を収めた第6巻とドキュメントを収めた第7巻はアドルフ・ベック（Adolf Beck, 1906-1981）によって編集され、1977年にすべての分冊が刊行された。補遺と索引を収録した第8巻はベックが準備作業を行い、それを引き継いでウーテ・エールマン（Ute Oelmann, 1949-）が完成させ、1985年に出版された。

バイスナーは先行するヘルダーリンの全集の中でも特にヘリングラート版（1913-1923）とツィンカーナーゲル版（1914-1926）を対抗モデルとし、シュトゥットガルト版がそれらを補完する全集となることを目指して編集作業を行った[3]。本稿の第1節と第2節では、バイスナーのシュトゥットガルト版の特徴をヘリングラート版およびツィンカーナーゲル版と比較しつつ明らかにする。第3節ではバイスナーにおける詩の有機体的な生成発展モデルについて、彼が影響を受けたゲーテの形態学と関連させながら分析する。シュトゥットガルト版はヘルダーリンの史的批判版の金字塔であり、現在においても文献学的に非常に高い評価を受けているが、その編集の方法論に対しては批判の声もある。第4節では、ベーダ・アレマンとペーター・ソンディによるバイスナー批判について取り上げ、テクストの編集と解釈との間の関係について論究する。最終節では、第1節から第4節にかけて分析したシュトゥットガルト版の特徴を振り返りつつ、1975年にシュトゥットガルト版のアンチテーゼとして登場したフランクフルト版（1975-2008）と

1 Vgl. Metzger / Kreuzer: Editionen (2020), S. 6.
2 Vgl. Plachta: Editonswissenschaft (2020), S. 41.
3 Vgl. Beißner: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961), S. 256ff; Ders: Editionsmethoden der neueren deutschen Philologie (1964), S. 78ff.

も比較しながら、シュトゥットガルト版が持つ可能性と限界について考察する。

1．ヘリングラート版との比較

ヘリングラートは1910年に『ヘルダーリンのピンダロス翻訳』（*Pindar-Übertragungen von Hölderlin*）というタイトルの博士論文によってミュンヘン大学から博士号を授与された。博士論文は1911年に「第1版への序論」（*Prolegomena zu einer Erstausgabe*）という副題を持つ書籍として出版され[4]、それまでほとんど無視されてきたヘルダーリンのギリシア文学翻訳や後期詩作における詩的言語の現代性に大きな注目が与えられることになった[5]。バイスナーはゲッティンゲン大学で古典文献学者ヘルマン・フレンケル（Hermann Fränkel, 1888-1977）の指導の下、1932年に『ヘルダーリンのギリシア語翻訳』（*Hölderlins Übersetzungen aus dem Griechen*）というタイトルの博士論文によって博士号を取得し、学者としてのキャリアをスタートさせた。ヘリングラートとバイスナーにおける博士論文のテーマの共通性からは、ヘリングラートがバイスナーに与えた大きな影響を読み取ることができるだろう。

ヘリングラートの博士論文の書籍版に「第1版への序論」という副題が付けられていることから分かるように、ヘリングラートはヘルダーリンの史的批判版を編纂する準備として博士論文を出版した。ヘルダーリンが1800年から1806年にかけて生み出した後期詩作は、従来狂気の産物として高い価値が与えられていなかったが[6]、ヘリングラートは自身の全集第4巻の序文でこの時代の詩作を「ヘルダーリンの著作の心臓、中核、頂上であり、本来の意味の遺産」（Hellingrath 4, XI）として高く評価している。しかしそれ以降の作品は「最後期の作品（späteste Gedichte）」として区別され、この時代のヘルダーリンは真に狂気の状態にあるとみなされ高い評価が与えられていない。したがって、ヘルダーリンが自作の詩に1806年以降に施したと推定される修正は軽視されるか、あるいは歪曲とみなされることになる。ヘリングラートによる後期作品と最後期の作品の区別はバイスナーにも受け継がれ、この区別は現在のヘルダーリン研究において標準的なものになっている[7]。

ヘリングラート版全集はヴァリアントを網羅的に掲載することを断念しており、全集第１巻の付録の序文では次のように述べられている。

---

4 Norvert von Hellingrath: Pinder-Übertragungen von Hölderlin. Prolegomena zu einer Erstausgabe. Jena (E. Diederichs) 1911.

5 ヘリングラートがヘルダーリンのギリシア語翻訳や後期詩作において認めた「固い結合」の美学については以下を参照。大田「『固い結合』の美学」(2021), 54-74 頁。

6 19 世紀にヘルダーリンの作品が評価されなかった理由としては、教養市民社会の確立に伴う「非市民的」文学の排除、健康イデオロギーの社会への浸透、規範としてのヴァイマール古典主義の影響力、自然科学と実証主義の隆盛に伴う「想像力」の価値に対する懐疑などが挙げられよう。この点に関しては以下の文献を参照。Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“ (1992), S. 45-73; Ota: Hölderlin-Renaissance und Paradigmenwechsel der Literaturwissenschaft im frühen 20. Jahrhundert (2021), S. 139-156.

7 Vgl. Reitani: Die Entdeckung der Poesie (2011), S. 163.

手稿がテクストから逸脱している箇所では、出来るだけ記録を残そうとする仕事は概観不可能で鑑賞に耐えないものになり、その場合、仕事は文献学者や植字工よりも、写真家にとって容易なものになるだろう。したがって、われわれは手稿を同様に再現しようとする完全性を断念したのだ。(Hellingrath 1, 353)

ヘリングラートは編者が手稿を網羅的に記述するよりも、写真化した方がよいと考えていたが、全ての手稿を写真化するのは現実的に不可能であることを悟って放棄したと推測される。バイスナーは写真化に対して明確に反対の態度を取っている。彼は「一朝一夕でヘルダーリンの筆記に慣れ親しむことは不可能」であり、「そのためにはつぶさに研究することが必要となる」とし、したがって、詩人の写真化された手稿を、「詩人の筆記の癖になじみがない素人に手渡すことはナンセンスであろう」とみなしている[8]。というのも「文献学者の使命はむしろ錯綜したものを解きほぐし、個々の詩の生成過程を最も完全な形で、しかも概観しやすいように提示することである」からだ[9]。バイスナーは、史的批判版の編集において何よりも重要なことは「完全性 (Vollständigkeit)」と「概観可能性 (Übersichtlichkeit)」を両立させることだという[10]。シュトゥットガルト版は、ヘリングラート版のように完全性を安易に放棄することを批判し、「史的批判版の方法論的原則」に忠実であることを旨とし、「ヴァリアントを可能な限り完全に網羅すること、あらゆる草稿を微細な箇所に至るまで厳密に解釈することに尽力する」ことを重視する[11]。しかし、全体を概観しやすくするために手稿の研究結果を空間的に提示することをせず、テクストの生成過程の諸段階を視覚的に見やすい形で時間的に再構成する形を取っている。

ヘリングラートはゲオルゲ・クライスからの美学的影響を強く受けており、ヘリングラート版全集第4巻の序言からは、20世紀の現代に神話を取り戻さねばならないとするゲオルゲ・クライスの文化的・宗教的プログラムを読み取ることが出来る。

> [ヘルダーリンの詩は (引用者注)] ほとんど信じられないようなことの証拠を提出する。すなわちまだわれわれの時代においても子供のように真実の信仰が神々を召喚できるということや、伝説、真の神話的な思考が、われわれ遅く生まれ落ちた者たちにおいてもまだ死に絶えていないことの証拠を。われわれが、どれほど離れてしまったかを知っているとしても、ヘラスにわれわれの前史と過去を見るなら、この青春時代の故郷とこの故郷の古い神々がわれわれにおいてもどういうわけかまだ生き生きとして、新しい存在と名に向かって押し寄せてくるということの証拠を。(Hellingrath 4, XIV)

この序言には、学問は客観性を追求するというよりも、宗教や神話や詩に奉仕するた

8 Beißner: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961), S. 257f.
9 Beißner: Bedingungen und Möglichkeiten der Stuttgarter Ausgabe (1942), S. 24.
10 Beißner: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961), S 259.
11 A. a. O., S. 253.

めに存在すると考えるゲオルゲ・クライスの美学が強く反映されている。ヘリングラートは、研究対象としてのヘルダーリンの詩的言語と、研究対象を分析する言語との距離を意識的に排除し、ヘルダーリンを思わせる詩的文体でヘルダーリンのテクストをパラフレーズすることをしばしば行っている。そこには詩作と文献学との問題をはらんだ一体化を読み取ることができるだろう。例えばヘリングラートは、後にバイスナーが賛歌「ムネーモシュネー」(*Mnemosyne*) 第3稿の第1詩節と同定した断片「熟して、火にひたされ…」（*Reif sind, in Feuer getaucht…*）について次のような注釈を書いている[12]。

> 大地は熟している。あらゆる神々が立ち寄ろうと準備している。われわれはしかしこの運命の時を背負っているように、大地の道をよろめき歩くのだが、その大地をあらゆる死すべきものが全一を目指して離れ去ろうとする。天上の者たちの訪れを許容する代わりに。われわれはこの二重の運動、われわれが担わねばならぬ二重の重荷、神々のわれわれへの突進、歓呼の声を上げながらこの地上を離れようとする世界の志向をほとんど見渡すことは出来ず、その志向はわれわれを色とりどりの多様性の中で混乱させ、われわれは神々が到来する未来と人間の過去の何千もの像の前で目を閉じようとし、二重の流れによって盲目的に駆り立てられるままになっている。海の波々を数えずに小舟に浮かんでいるように。（Hellingrath 4, 307）

ヘリングラートがヘルダーリンの全集の編集作業を行う際に助言を求めたゲオルゲは、文献学者に要請される文学テクストの文献学的な分析作業を嫌悪し、詩作と学問の間を架橋する試みを厳しく拒絶していた。ゲオルゲは『芸術草紙』において、自身の反学問的な立場を以下のように表明している。

> 思想や歴史の方法を通じて芸術に接近しようとするものは、最悪のものも最良のものも同様に物質（素材）として把握してしまうという危険を冒すことになる〔…〕。そのようにして生き生きとしたものについての学問は、血の通っていない数量の学になってしまう。[13]

ヘリングラートはヘルダーリンの詩的言語を概念的に説明するという介入行為を嫌悪しつつも、しかし他方ではヘルダーリンの読者層を拡大するための教育的な行為を完全に断念することも出来ず、その２つの対立する志向の間で一種の妥協を図った。従ってヘリングラート版の資料編は、ヘルダーリンの詩の「翻案、パラフレーズそして概念的な解説の融合物」[14]とみなすことができよう。

バイスナーは「理論に対する文献学的な懐疑家」として知られ、20世紀の様々な文学や美学の思潮に出会いつつもそのどれも代表することはなく、テクストにおける「特殊

12 ヘリングラートはこの断片に「賛歌的な世界と情趣の否定」（Hellingrath IV, 307）を読み取り、この断片を「狭義の叙情詩」（a. a. O., VI）のジャンルに分類している。

13 Blätter für die Kunst VII. Folge (1904), zitiert nach Landmann: Der George-Kreis (1980), S. 68.

14 Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“ (1992), S. 105.

なもの、逸脱したもの、不規則的なものに固執するという意味における」文献学者としてふるまった[15]。彼はあらゆる美学理論や文学理論から距離をとり、文献学者として文学テクストを徹底して研究対象ととらえ、その研究対象に対して常に学問的な距離を取って冷静に向かい合うことを心がけた。例えば「ムネーモシュネー」第3稿についてバイスナーは、ヘリングラートとは異なり、ヘルダーリン自身の詩的言語と研究対象を分析する言語とを明確に区別し、またヘルダーリンの他の作品や他の全集も参照しつつ、文献学者の冷静な筆致で全体解説を記述している。

> 第1詩節は確かに—第3稿においては他の2つの稿よりもより明瞭に—最終的に「年の完成」(「多島海」第274詩行参照)の賛歌的な雰囲気を「否定」(ヘリングラート版第4巻310頁以下参照)しようと試みている。第2詩節は、決断から逃れようとする人間を課された状況へと連れもどそうとし(小舟を揺り動かす「海」ではなく「大地に差す日の光...」と「乾いたほこり」へと)、そして人間を最終的にアルプスの「高い街道」に置く。第3詩節においては、黄金期や過渡期においても実を示してきた古代の英雄たちが補正・確認されつつ、想起(「ムネーモシュネー」)されている。(StA 2, 825)

バイスナーはテクスト解釈に思想や文学理論などを介入させることを忌避し[16]、形式的・文体的な側面の分析を重視する傾向にあるが、そこには実証主義的文学研究の遺産が潜んでいる。バイスナーは自身の編集方法について論じた論文の冒頭に、実証主義的文学研究で有名なヴィルヘルム・シェーラー(Wilhelm Scherer, 1841-1886)が「根本的な文献学の仕事」として挙げた「編集することと説明すること(Herausgeben und Erklären)」という言葉を引用している[17]。ヴィルヘルム・ディルタイ(Wilhelm Dilthey, 1833-1911)は、「精神科学(Geisteswissenschaft)」を提唱し、歴史や文化に向かう人間の基本的な態度である「了解(Verstehen)」と、自然科学的な客観的知識追及の態度を表す「説明(Erklären)」とを対置してドイツの人文科学に大きな影響を与えた[18]。バイスナーが論文でテクスト解釈の領域に精神科学的な「了解」ではなく「説明」の語を用いている所には、実証主義的文学研究の強い影響を読み取ることができよう[19]。またバイスナーのテクスト解釈において、テクスト外に存在する様々な要素がカッコに入れられ、個々の作品とその内在的構造に主眼が向けられる所には、1930年代末以来ドイツで隆盛を見せた作品内在分析との深い関係が存在していると考えられる[20]。

---

15 Barner: Die Attraktivität der Theorie-Skepsis (2010), S. 273ff.

16「哲学や神学の概念的言語に翻訳されうる内容や素材は詩自体とは全く関係がない。」Beißner: Der Erzähler Franz Kafka (1983), S. 21f.

17 Beißner: Editionsmethoden der neueren deutschen Philologie (1964), S. 72.

18 Vgl. Dilthey: Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie (1924), S. 144.

19 Vgl. Nutt-Kofoth: Friedrich Beißner. Edition und Interpretation zwischen Positivismus, Geistesgeschichte und Textimmanenz (2011), S. 199ff.

20 Vgl. a. a. O., S. 209.

2．ツィンカーナーゲル版との比較

フランツ・ツィンカーナーゲル（Franz Zinkernagel, 1878-1935）は、1907年に『ヘルダーリンの「ヒュペーリオン」の発展史について』（*Die Entwickungsgeschichte von Hölderlins Hyperion*）というタイトルの教授資格申請論文をテュービンゲン大学に提出し、大学教授の資格を取得した。この論文の補遺の中には、『ヒュペーリオン』の様々な作業段階における未公刊の７つの構想の断片が収録されている[21]。ツィンカーナーゲルは、ヘルダーリンの書簡や同時代の哲学や文学を考慮に入れることによって、『ヒュペーリオン』の諸草稿をきわめて精確に年代順に整理することに成功しており、現在一般的に認知されているものに近い『ヒュペーリオン』の成立史を打ち立てた。特に特筆すべきは『ヒュペーリオン』の韻文稿の成立に関する研究である。ツィンカーナーゲルは『ヒュペーリオン』韻文稿に対するフィヒテの強い影響を読み取り、韻文稿は従来想定されていたようにテュービンゲン時代ではなくイェーナ時代になって初めて成立したと分析した[22]。

ツィンカーナーゲルは、シュトゥットガルト版で最終前稿および最終稿の準備段階とされている断片に、ルートヴィヒ・ティーク（Ludwig Tieck, 1773-1853）の小説『ウィリアム・ロヴェル』（*Die Geschichte des Herrn William Lovell,* 1796）からの影響を見、これらの断片を「ロヴェル稿」と名付け、フランクフルト時代に成立したと推定した[23]。バイスナーはツィンカーナーゲルによる「ロヴェル稿」のグループ分けと成立年代の推定は誤っているとし、ツィンカーナーゲルが論拠とする原稿は後になってからヘルダーリンの義弟カール・ゴックの手によって清書されたものであり、ツィンカーナーゲルはゴックの筆跡の特徴を知らなかったと反論している（StA 3, 306ff.; 517ff.）[24]。

ツィンカーナーゲルの教授資格申請論文は、シラー、フィヒテ、シェリング、ティークといった同時代の哲学者たちや文学者たちのヘルダーリンに対する影響を実証主義的に解明することを主眼としており、この論文からヘルダーリンの詩人としてのオリジナリティーを見いだすことは困難である。このことは例えば以下の引用から容易に読み取れよう。

> 並々ならぬ程度に、ヘルダーリンは彼の時代の子として現れている。あの18世紀の最後の数十年においてドイツ人の生を絶え間ない陶酔状態に置いたあらゆる偉大な傾向が、この若い詩人の世界において反映している。[25]

このように私はテクストを推敲する間、ますますヘルダーリンの同時代の哲学への

---

21 Zinkernagel: Die Entwickungsgeschichte von Hölderlins Hyperion (1922), S. 207-242.

22 A. a. O., S. 1-22.

23 A. a. O., S. 113-143.

24 フランクフルト版（FHA 10, 237, 289-291）もミュンヘン版（MA 3, 308-315）もツィンカーナーゲルの論を支持していない。

25 Zinkernagel: Die Entwickungsgeschichte von Hölderlins Hyperion (1922), S. 5.

依存を強調せざるを得なくなった。〔…〕無理解で不器用な合理主義者と思われるかもしれないという危険は覚悟の上で言うならば。[26]

ツィンカーナーゲルの教授資格申請論文は、『ヒュペーリオン』における「思考内容への問い」[27]をめぐる論究を主眼とし、言語芸術としての形式的・文体的な側面についての分析を等閑視している（Zinkernagel 1, 150）。バイスナーは「同時代や過去の模範的存在からの題材上のモチーフの借用は、かつて想定されていたほど重要なものではない」（StA 3, 432）としてツィンカーナーゲルの分析を批判し、「『ヒュペーリオン』の成立史の研究は語り手の優れた技巧の発展を明瞭に認識させる」（a. a. O., 433）と主張する。というのも、バイスナーによれば、「ヘルダーリンの生き生きとした哲学的な興味は、その段階が一段一段上昇していくにつれ、ますます明瞭な形態を纏うように変化していくからである」（ebd.）。

ツィンカーナーゲルは、出版社のインゼル社と契約を結び、1911年からヘルダーリンの史的批判版の編集に取りかかり、1914年から1926年にかけてテクストを収録した5つの巻が出版されたが、テクスト批判のための資料編を収録した巻は出版されずに終わった。テュービンゲン大学の病跡学者であるヴィルヘルム・ランゲ（Wilhelm Lange, 1875-1949）は、ツィンカーナーゲルの協力の下[28]、著作『ヘルダーリン—病跡学的考察』（*Hölderlin. Eine Pathographie,* 1909）を出版し、1800年以降のヘルダーリンの作品と手紙の中に「早発性痴呆（Dementia praecox）」の症候を読み取り、ヘリングラートがヘルダーリンの作品の頂点とみなした1800年から1806年にかけての後期詩作を単なる認知機能の障害の産物として芸術的に低い評価を与えている[29]。ツィンカーナーゲルもこの評価を踏襲し、ヘルダーリンの作品を精神的には健康だが他の文学者のエピゴーネンである初期と中期、精神を侵された詩人の支離滅裂な発話によって特徴付けられる後期に区分している[30]。ツィンカーナーゲルは、1799年までの『ヒュペーリオン』を含めたヘルダーリンの作品を「ほとんど自立したものではない」[31]と評価し、世紀が変わった後ほどなくして精神病の症状がはっきりと現れるようになったとする[32]。ただし彼の全集に

26 A. a. O., S. XIII.

27 Ebd.

28 このランゲの著作にはツィンカーナーゲルへの献辞が載っており、また序文にはこの研究がツィンカーナーゲルの示唆によるものであることが述べられている。Wilhelm Lange: Hölderlin. Eine Pathographie. (1909), S. XII.

29 Lange: Hölderlin. Eine Pathographie (1909), S. 71. ランゲの著作を翻訳した西丸四方によれば、「早期性痴呆」とは現在「精神分裂病」と診断されている病気のことであるが、ランゲの著作が成立した頃「精神分裂病」の名はまだ存在しなかったとされる。ランゲ-アイヒバウム（西丸四方訳）『ヘルダリン—病跡学的考察』1989, 98 頁。なお日本精神神経学会は、「精神分裂病」という病名が誤解や偏見を招きやすいという理由で、2002 年 8 月以来「統合失調症」と言う病名を正式に使用している。

30 Vgl. Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“ (1992), S. 64.

31 Zinkernagel: Die Entwickungsgeschichte von Hölderlins Hyperion (1922), S. 137.

32 ランゲによれば、ヘルダーリンの精神病はハウプトヴィル滞在中の 1801 年 1 月から 4 月にかけて始まったとされ、最初の本当に病的な詩は「アルプスの麓に歌う」（Unter den Alpen gesungen, 1801）であるといわれる。Vgl. Lange: Hölderlin (1909), S. 92.

おいては「健康」な詩と「狂気」の詩の区別はせず、伝統的な形式による分類がなされている。

ツィンカーナーゲルは自身のヘルダーリン全集の資料編を出版せずに1929年に死去した。ツィンカーナーゲルのテクスト編集が追求する目的は、ヘルダーリンのテクストを美学的に評価することではなく、テクストを資料として記録し、歴史的な文脈の中に配置することにあるといえよう。ツィンカーナーゲルは史的批判版としての要求を満たすべく、テクストの諸段階やヴァリアントを提示し、厳密な方法でテクストの異同を表示している（図１参照）。彼は資料編の序文で、読者に紙とペンを用意し、読者自身が編者の指示通りに詩人の手稿を再構成することを勧めている。

> このようなより煩雑な方法が選ばれたことは、これらの異稿同士の時間的な前後関係が至るところで確実に確かめられるかどうかというとてもよく生じる懸念のみならず、ヴァリアントの資料編を利用するどの真面目な読者に対しても、一枚の紙の上に自分自身で手稿の原型を再構成する可能性をあらゆる箇所において与えたいという切なる願いから、説明されうる。（Zinkernagel 2, 32）

バイスナーは、ツィンカーナーゲルが「ヘリングラートとその協力者とは異なり、複雑に縺れ合う草稿を回避することはなかった」として、彼の文献学的厳密性と完全性を追求しようとする姿勢を評価しつつも、「しかし、彼はテクストを一語一語分解して、あらゆる語にいわば断固として顕微鏡を向け、驚嘆すべきだが模倣すべきだとは思われない極度の厳密さによって」読者に困難な課題を与えているとして批判する[33]。バイスナーによれば、ツインカーナーゲルが選択したヴァリアントの提示方法は、概観可能性という点で大きな欠点があるとされる。バイスナーは「完全性と概観可能性のジレンマを逃れる方策」は、「ヴァリアントのリストが手稿の研究結果を『空間的に』記述するのではなく、成立の『時間的な』層を区別し、互いに際立たせる」[34]ことにあると考える。シュトゥットガルト版はテクスト生成の時間的な諸層を視覚的に分かりやすく提示するために、左上から右下へと下りていく階段を思わせる「階段モデル（Treppenmodell）」と呼ばれる方法を用いている（図2参照）。この階段モデルにより、ヴァリアントは二つの次元から、すなわち統語的には水平方向に、また同時に範列的（同じカテゴリーの要素間の置き換え可能な関係）には垂直方向に読むことが可能となる。このバイスナーによる階段モデルは、学術版編集の歴史において「決定的な画期をなすもの」[35]であり、解読することがしばしば困難なヘルダーリンの混乱した手稿空間からテクスト生成の通時的な発展プロセスを明晰に読み取り、そのプロセスの諸段階を視覚的に分かりやすく再構成することに成功したといえよう。しかし、修正のプロセスがいつ行われたか、また草稿のどの位置に修正が書き込まれたかは分からないという欠点もまた存在する。

---

33 Beißner: Editionsmethoden der neueren deutschen Philologie (1964), S. 78f.

34 Beißner: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961). S. 259.

35 Plachta: Editionswissenschaft (2010), S. 41.

Dem Jüngling daß er schau u. sie predige *darüber rechts* wie an Narzissus Grab / Dem ⟨*darüber* [?] *gestr.*⟩ Thoren — was ihm Ruhe schaffet *gestr. davor* Der Vater *dahinter* — deine Weisheit lerne / Eh ⟨*dahinter* -e⟩ es *korr. zu* sie ihm (*gestr.*) lehret ⟨*gestr. darüber* predigt⟩ der Todtenrichter. St_1 Dem Jüngling, daß er wie an Narzissus Grab / Der Vater, deine ⟨*dahinter* -r⟩ Sprüche lerne *2 Wörter gestr. dahinter* (Lehren ⟨*Buchstabe gestr.*⟩ schaue ⟨*gestr. darüber* lausche⟩) / Eh' der Entscheidung Gericht sie predigt. *v. 2. Hand am Fuß der Seite Text* St_2

図1：ツィンカーナーゲル版におけるヴァリアントの提示
(Zinkernagel 2, 1085f.)

6—8: (1) Dem Jüngling daß er (*a*) schau u. es predige
Dem Thoren — was ihm Ruhe schaffet —
Eh es ihn lehret der Todtenrichter.
(*b*) schau u. sie predige
Dem Troß
(*c*) wie an Narzissas Grab
Der Vater deine Weisheit lerne
Ehe sie predigt der Todtenrichter. H^1
(2) Dem Jüngling, daß er, wie an Narzissas Grab
Der Vater, (*a*) deine Sprüche lerne,
(*b*) deine Lehren schaue
(*c*) deiner Lehre lausche
Eh' der Entscheidung Gericht sie predigt. H^2
(3) *Text, später am unteren Rand* H^2

図2：シュトゥットガルト版におけるヴァリアントの提示
(StA 1, 398f.)

3．有機体として生成する詩

この階段モデルの背景にあるのは、詩には完成形態としての最終稿が存在しなければならず[36]、そこに向かって目的論的に詩が生成発展していくとするバイスナーの考えである。

詩が完成に向かって目的論的に生成発展するという考え方は、すでにヘリングラートに見られる。ヘリングラートはこの生成発展のプロセスを以下のように植物の比喩を用いて説明している。

> テクストは出来るだけまとまりのある形で概観できるように詩人の円熟し終えた作品を提示しなければならない。〔…〕巻の5つの区分のいずれも一連の明瞭な発展を構成しなければならない。それに応じて必要があると思われる箇所で、最初の萌

36「『全集』の出版においては、最終稿が欠けてはならない。それを要求するのは、自分の作品に対する権利を持っている詩人への敬意である。」Beißner: Editionsmethoden der neueren deutschen Philologie (1964), S. 95.

> 芽から最終形態（あるいは歪曲）にいたる詩のよどみのない移行から、個々の出来るだけ多様な諸状態がいくつかの稿として取り出された。（Hellingrath 4, 269f.）

バイスナーもヘリングラートと非常によく似た表現で植物の比喩を使って詩の目的論的な生成発展のプロセスについて解説しているが、ここからは明らかにヘリングラートからの大きな影響を読み取ることが出来るだろう。

> この方法に従って成立のヴァリアントを提示することは、計画や構想の最初の萌芽から最終的な形態に至るまでの理想的な成長を具体的に説明する[37]。

バイスナーは様々な講演や論文において、自然と芸術の類似性を指摘するゲーテからの引用（「自然作品と芸術作品はそれらが完成してしまったら知ることはできない。それらをいくらか理解するためには、それらが生成しているところをすばやくつかまなければならない。」〔Goethe an Carl Friedrich Zelter, 4. August 1803, FA 32, 368〕）をしばしば用い、テクストの生成を提示する「階段モデル」について説明している[38]。ゲーテはあらゆる形態は常に変化してやまないと考え、ある形態が絶え間なく変化し続けることを「形成（Bildung）」と呼んだ。

> しかし、すべての形態、とくに有機的形態を観察すると、どこにも持続するもの、静止するもの、完結したものが現われないことに気が付く。むしろ、すべてのものは絶えざる運動のなかで揺れ動いているのである。それゆえ我々の言語は、形成（Bildung）という言葉を生み出されたものについても、また現に生み出されつつあるものについても当てはまるものとして使うことを常にしているのである。（FA 24, 392）

バイスナーはテクストの生成プロセスをゲーテの「形態学（Morphologie）」の用語である「メタモルフォーゼ（Metamorphose）」[39]という言葉で表現している。ゲーテは形態学を「有機的自然の形成と変形（Bildung und Umbildung organischer Naturen）」（FA 24, 399）の学であると定義し、現象として自然の中に現れる個々の形成と変形の運動を有機的自然全体との関係の中で把握することを重視した。メタモルフォーゼは「有機的自然の形成と変形」の法則にほかならず、ゲーテは「植物のメタモルフォーゼ試論」（*Versuch die Metamorphose der Pflanzen zu erklären*, 1790）において、植物の原型は葉であり、その原型である葉は、前進と後退、拡張と収縮を繰り返しながら、最終的に花や果実のような完成形態を生みだすと論じている。

---

37 Beißner: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961), S. 260.

38 Beißner: Hölderlins letzte Hymne (1961), S. 212; Ders: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961), S. 252.

39 A. a. O., S. 252.

〔…〕自然は、一つの部分を他の部分から生み出し、唯一の器官（＝葉）の変化により極めてさまざまな形態を提示するのである。（FA 24, 110）

同一の器官（葉）が多種多様に変化するのを我々に見せる作用は、「植物のメタモルフォーゼ」と呼ばれた。（ebd.）

植物は芽を出しても、花を開いても、果実を結んでも、多様に規定され、しばしば形態を変化させながら自然の指示を果たしていくのは、常に「同一の器官」なのである。茎においては葉となって拡張し、極めて多種多様な形態をとったのと同じ器官が、今度は萼になって収縮し、花弁となって再び拡張し、雄しべと雌しべとなって収縮し、最後に果実として拡張するのである。（a. a. O., 149）

バイスナーは、詩の構想の萌芽としての原型がまず存在し、その原型がメタモルフォーゼして多様な形態に変形しながら、最終的な完成形態へ向かって成長していくと考えている。バイスナーは詩の原型としての言葉を「萌芽の言葉（Keimworte）」と名付け、この「萌芽の言葉」から詩が有機的に成長していくとする。

まず最初に詩人は一組の動機や表現―萌芽の言葉―をページの広い空間に配分する。この萌芽の言葉から後に完成した詩節が生い育つ（aufwächst）。そしてこの成長は、それに同行しまたそれを詩人ともに詩作する手稿の解釈者を、繰り返しもっとも内奥にある核心へと喜ばしくも立ち戻らせるというやり方でなされる。[40]

バイスナーは論文「ヘルダーリンの最後の賛歌」（*Hölderlins letzte Hymne,* 1961）の中で、萌芽の言葉から詩がどのように有機的に成長・発展していくのかについて、具体的な例を挙げながら詳しく説明している。例えばヘルダーリンのエレギー「パンと葡萄酒」（*Brot und Wein,* 1800/1801）は3つの草稿が存在するが、第1草稿において第1詩節の開始点となる最初の萌芽の言葉は、「街頭の馬車（die Wagen der Gasse）」であるとされ、この萌芽の言葉から第2の作業過程においてさらに4つの詩行からなる萌芽の言葉が「発芽する（aufsprossen）」といわれる[41]。

die Wagen der Gasse	街頭の馬車
die Früchte des Marktes	市の果物
Und die (1) schwärmerische	そして（1）熱狂的な
(2) träumerische, die Nacht steigt	（2）夢のような夜がたちのぼる

40 Beißner: Hölderlins letzte Hymne (1961), S. 214.
41 Ebd.

Prächtig und traurig herauf.　　壮麗にそして悲しみを帯びて

Wunderbar　　驚嘆すべき
（StA 3, 593）

これらの萌芽の言葉は詩の構想の発展とともに生長し、また新たに出現する別の萌芽の言葉とともに詩の中で何度も繰り返されることとなる[42]。「パンと葡萄酒」の主題は「夜」であるが、ヘルダーリンにとって「夜」とはギリシアの神々が没落した後の世界を覆う神なき「乏しき時代」（StA 3, 94）という神話的な意味をはらんでいる。「夜」は将来の「昼」を準備する「青銅の揺籃」（a. a. O., 93）の時代であり、夜の神である酒神ディオニュソスは、人々に「聖なる酔い」（a. a. O., 91）と「奔流する言葉」（ebd.）を恵み、かつて神々が存在していた「昼」についての詩的な「聖なる記憶」(ebd.) を授けるとされる。また夜の時代には神々のうちの最後のものとして「物静かな精霊」（a. a. O., 94）たるイエス・キリストが出現し、長い夜の後に新しい昼が再来することが告知される。「パンと葡萄酒」の第 1 草稿の第 1 詩節に現れた萌芽の言葉には、全 9 詩節に渡って展開される「夜」の主題の核心的な意味が凝縮されているといえよう。

また、バイスナーは論文「ヘルダーリンの最後の賛歌」の中で、賛歌「ムネーモシュネー」の萌芽の言葉からの有機的な生成発展について詳細に論じている。収拾不能に思えるほど複雑に錯綜したヘルダーリンの手稿の中から、バイスナーは「ムネーモシュネー」の第1草稿と第2草稿を区別することに成功し、またさらに完成稿と考えられる第3草稿を発見した。バイスナーによれば、以下の二行がこの賛歌全体の萌芽の言葉であるという。

Am Feigenbaum　　イチジクの木のそばで
Ist mir Achilles gestorben.　　私にとってアキレウスは死んだ
（StA 2, 817）

この二行の萌芽の言葉を詩人は第 1 草稿の頁の中央部に最初に書き付けたとされる。詩の構想の発展とともにギリシア神話の英雄アキレウスに対する詩人のひたむきな同情心がさらに強調され、萌芽の言葉に所有代名詞「私の（mein）」が付加された形（Am Feigenbaum / ist mein Achilles mir gestorben.〔イチジクの木のそばで／私のアキレウスは私にとって死んだ〕）が、頁の下の部分に繰り返される[43]。この 2 行の言葉は、バイスナーが完成稿とみなす第 3 稿の第 3 詩節の冒頭におかれることになる（StA 2, 198）。この言葉には、英雄の死を回想することによって保持することという賛歌全体の主題が凝縮されていると解釈されよう。

42 Beißner: Hölderlins letzte Hymne (1961), S. 214ff.
43 Beißner: Hölderlins letzte Hymne (1961), S. 222.

しかし、この2行の言葉に賛歌全体の主題が凝縮されているといっても、本当に賛歌がこの2行の言葉から有機的に発展していったかどうかについて確証があるわけではない。ゲーテの自然哲学の大きな影響を受けた詩の生成発展モデルからは、バイスナーの古典主義的な芸術観を読み取ることが出来よう。成長する有機体としての文学テクストの生成モデルは古典主義的な理念形であり、必ずしも現実のテクストの生成プロセスと一致しているとはいえない[44]。また、詩には最終的な完成形態というものが存在し、原型としての萌芽の言葉から完成形態へと有機的に発展していくと考えるバイスナーのテクスト編集においては、詩の異稿は最終的な完成稿に従属する予備段階にすぎず、それ自体で独立した価値を持たないことになるだろう[45]。

4．テクスト編集と解釈学

バイスナーのシュトゥットガルト版は、ヘルダーリンの史的批判版の金字塔とされ、そのテクスト批判の文献学的水準の高さを多くの研究者は称賛しているが、批判の声も寄せられていることは見逃すことはできない。ベーダ・アレマン（Beda Allemann, 1926-1991）とペーター・ソンディ（Peter Szondi, 1929-1971）は、テクスト編集と解釈学の関係という観点から、バイスナーの編集方法を批判している。

マルティン・ハイデガーは著作『ヘルダーリンの詩作の解明』（*Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung,* 1941）の中でヘルダーリンの詩「あたかも祝日のように…」（*Wie wenn am Feiertage,* 1801）を解釈している。しかし、ここでハイデガーは普段よく用いていたヘリングラート版には従わず、自分自身でヘルダーリンの手稿に取り組み、テクストを編集した。ヘリングラート版ではこの詩の39行目は「生え出る（entwächst）」となっているが（Hellingrath 4, 152）、ハイデガーは自身でヘルダーリンの手稿を検討した結果、この動詞を「entwacht（目覚める）」と読み取り、以下のように詩のテクストを編集した。

[…] im Liede wehet ihr Geist,	歌の中にその精神は吹きわたっている。
Wenn es von der Sonne des Tags und warmer Erd	それが真昼の太陽と温かな大地によって
Entwacht,	**目覚める**とき、

(Heidegger: »*Wie wenn am Feiertage...*«, S. 50)〔太字による強調は引用者による。〕

ハイデガーの手稿の編集と解釈は密接な関係にある。ハイデガーはこの箇所で自然が眠っている状態から「目覚め」、目覚めにおいて自然が熱狂のうちに「精神化」することを強調している。

44 Vgl. dazu Metzger / Kreuzer: Editionen (2020), S. 7.
45 Vgl. ebd.

神聖さは自然の本質である。この自然は朝になるものとして、目覚めのなかで（im Erwachen）その本性を露にする。〔…〕目覚めのなかで自然は自分自身になる。熱狂＝精神化（Begeisterung）は自分自身を再び新たに感じ、「万物の創造者（die Allerschaffende）」となる[46]。

バイスナーはシュトゥットガルト版の注釈で、この詩の手稿の39行目に書かれているentwachtという語は、ヘルダーリンにおいて常に繰り返し現れる書き間違いとして、彼の他の7つの詩において対応する書き間違いの例を挙げている。［*vgl. An die Äther* v. 38 H^2 (aufwächt → aufwächst) ; *Rousseau* v. 17 (entwächt → entwächst); *Die Liebe* v. 17 H^2 H^3 (erwächt → erwächst); *Der Gang aufs Land* v. 40 (wächt → wächst); *Heimkunft* v. 9 H^3 (wächt → wächst); Patmos v. 3 H^7 (wächt → wächst); *An die Madonna* v. 19 H^3 (wächt → wächst)］（StA 2, 674）

バイスナーは詩人のこのような過去の書き間違いのデータに基づき、ヘルダーリンの手稿に現われたentwachtという動詞を「生え出る（entwächst）」の書き間違いだと推論し、自身のテクスト編集ではこの動詞をヘリングラートと同様にentwächstに修正している。

[…] im Liede wehet ihr Geist,	歌の中にその精神は吹きわたっている。
Wenn es von der Sonne des Tags und warmer Erd	それが真昼の太陽と温かな大地から
Entwächst,	**生え出る**とき

（StA 2, 119, v. 37ff.）〔太字による強調は引用者による。〕

アレマンはこのバイスナーのテクスト編集を批判し、バイスナーの例証のどの1つをとっても、それらはsの脱落を推定させても、ウムラウトの脱落は推定させず、1語の中での2つの誤りの重なりを説明できていないと批判する[47]。ここでバイスナーが用いている方法は「平行箇所例証法（Parallelstellen-Belege）」と呼ばれるものであり、この方法は帰納法に基づく実証主義の見かけ、すなわち自然科学的な精確さの見かけを取っている。アレマンは、自然科学的な証明方法をテクスト批判に用いることはできないのではないかと問う。アレマンによれば、ハイデガーのテクスト編集は解釈学的循環の運動から出てきたものであり、解釈学的循環はテクスト批判の作業と切り離すことができないのだ[48]。

アレマン同様にソンディもバイスナーの編集方法が持つ実証主義的な側面について批判している。ヘルダーリンの賛歌「平和の祭り」（*Friedensfeier,* 1802）の第1節は風景の隠喩であるか、それとも食卓が並ぶ広間そのものを表しているかを巡って論争があるが、バイスナーはシュトゥットガルト版の注釈において、風景の隠喩を見る解釈は誤っていると指摘する（StA 3, 549）。シュトゥットガルト版はこの詩の最終稿の第1節を以下の

46 Heidegger: »Wie wenn am Feiertage...« (1981), S. 60.
47 Allemann: Hölderlin und Heidegger (1954), S. 6.
48 Vgl. a. a. O., S. 7f.

ように編集している。

Der himmlischen, still wiederklingenden,	天上的な音調は、静かに反響し、
Der ruhigwandelnden Töne voll,	安らかに移りゆく旋律をただよわせ、
Und gelüftet ist der altgebaute,	風が吹き抜けているのは、古代に建てられ、
Seeliggewohnte Saal; um grüne Teppiche duftet	至福の者たちに住まわれた広間。緑の絨毯の周りには
Die Freudenwolk' und weithinglänzend stehn,	喜びの雲がかすみたち、遠くまで輝きを放つのは、
Gereiftester Früchte voll und goldbekränzter Kelche,	完熟した果実に満ち、金色の花づなが飾る杯であふれ、
Wohlangeordnet, eine prächtige Reihe,	良く整えられ、華やかな列をなし、
Zur Seite da und dort aufsteigend über dem	脇のここかしこ、平らにならされた床の上に
Geebneten Boden die Tische.	立ち並んだ食卓の数々。
Denn ferne kommend haben	というのも遠方から
Hieher, zur Abendstunde,	ここに、夕べの時に、
Sich liebende Gäste beschieden.	愛に満ちた客たちが来ることになっているからだ。
	(StA 3, 533)

バイスナーによれば、ヘルダーリンの全作品において風景の隠喩が意図されている場合、必ず明瞭な形で比較がなされているという。例えば「パンと葡萄酒」の第57行「der Boden ist Meer! und Tische die Berge（床は海！そして食卓は山々）」では、はっきりとした比較が明確な等式の形で示されているとされる (StA 3, 549) 。また「パトモス」（*Patmos*）においては、初稿の第30行で「mit tausend Gipfeln duftend（何千もの峰々と共に香りたちながら)」と書かれていた詩句が、後続する諸稿の同じ行では「Von tausend Tischen duftend（何千もの食卓によって香り立ちながら)」と書き換えられ、イメージが大胆に変容しつつも、次の第31行で「アジア（Asia)」という語が置かれているために、風景の隠喩を意図していることが明らかであるとされる（ebd.)。従って、バイスナーは「平和の祭り」の第 1 節が風景の隠喩として意図されているとすれば、それは「ヘルダーリンの全作品において類例のないものであるだろう」とみなす（ebd.)。

ソンディは、このバイスナーの反論が、一般的法則を認識し、それによって現象を説明しようとする自然科学的原理に基づいていることを指摘する[49]。ソンディによれば、個別の文学テクストは、自然科学におけるような「類例的な個（Exemplar)」としてではなく、常に「かけがえのない個（Individuum)」として現れるのであって、自然科学

49 Szondi: Über die philologische Erkenntnis (1978), S. 273.

的な方法を文学作品に適用することはできないとされる[50]。バイスナーは自分の認識論的前提を十分に反省せず、事実を盲信し、事実を用いるだけで文学テクストに関する論証が可能であると考えている[51]。しかし、事実の持つ証拠としての性格も解釈によってはじめて露になるものである。「パトモス」において初稿が後続する諸稿の隠喩化の証拠を提示しているというのも、バイスナーの解釈の操作に基づいている。テクスト批判には解釈学的循環の運動が不可欠であるが、バイスナーはこのことを十分に理解していない、とソンディは批判する[52]。

ハイデガーが編集したように、「あたかも祝日のように…」の39行目の動詞を手稿に書かれている通り「entwacht（目覚める）」ととった方が、この詩の文脈により適合すると思われる。また「平和の祭り」の第1行目を風景の隠喩とみなす解釈も適切であろう。これらの解釈はバイスナーの依拠する平行箇所例証法によっては否定されるものであるが、アレマンやソンディが主張する通り、詩は一回的で単独的な出来事として現れるものであり、またテクスト編集と解釈学的運動との間には不可分の関係があるということを忘れてはならない。しかしだからといって、詩の一回性や単独性を絶対化して平行箇所例証法という編集方法自体を否定することもまた誤りであろう。テクスト編集において語句を確定させる際、平行箇所例証法を使う必要がある場合もあり、場合に応じて適切な編集と解釈の方法を選択すべきである。

5．おわりに：シュトゥットガルト版の可能性と限界について

シュトゥットガルト版は、ヘリングラート版とツィンカーナーゲル版を対抗モデルとしながら、ヘルダーリンの史的批判版の決定版となることを意図して編集された。バイスナーはヘリングラートと同様、以前は狂気の産物とされていた1800年から1806年にかけての後期詩作に大きな文学的価値を見いだした。しかし、ヘリングラート版の文献学的不完全さを批判し、「完全性」と「概観可能性」を両立させた文献学的に厳密な資料編を編集した。

ヘリングラート版の編集には、ゲオルゲ・クライスの美学が強く反映されている。バイスナーは、編集に思想を介入させることを避け、形式的・文体的な側面の分析を重視する傾向にあるが、そこには実証主義的文学研究や作品内在分析の影響が見られる。

バイスナーは、実証主義的文学研究から影響を受けているという点でツィンカーナーゲルと共通し、文献学的厳密性と完全性とを追求しようとするツインカーナーゲル版の姿勢を評価している。しかし、ツィンカーナーゲル版におけるテクストのヴァリアントの提示方法は概観可能性という点で大きな欠点があるとし、シュトゥットガルト版は「階段モデル」と呼ばれる画期的な方法を用いて、テクスト生成の通時的な発展プロセスを視覚的に明瞭な形で再構成することに成功した。

---

50 A. a. O., S. 274f.
51 A. a. O., 277f.
52 A. a. O., 279.

バイスナーは、詩にはその構想の原型である「萌芽の言葉」が存在し、そこから完成形態に向かって有機的に詩が生成発展していくと考えた。シュトゥットガルト版は、完成に向かって目的論的に生成発展する詩のそれぞれの段階を、階段モデルという形式で提示している。このようなバイスナーのテクスト生成の考え方は、ゲーテの形態学と古典主義的芸術観から大きな影響を受けている。しかし、成長する有機体としての文学テクストの生成モデルは古典主義的な理念形であり、必ずしも現実のテクストの生成プロセスを反映してはいない。

文献学的水準の高さと資料編のシステムの画期性によって、シュトゥットガルト版は多くの研究者から文学の史的批判版の模範とみなされているが、批判の声も寄せられていることは無視できない。アレマンとソンディはバイスナーの編集における実証主義的な態度を批判し、文学テクストは自然科学的な一般法則に還元できない一回的で単独的な出来事として現れるものであり、テクスト編集と解釈学的運動との間には不可分の関係があるとする。

1943年に第1巻が刊行されて以来、シュトゥットガルト版は30年近くもヘルダーリンの史的批判版の唯一の規範とされてきたが、1975年にD. E. ザットラー（Dietrich Eberhard Sattler, 1939-）が、シュトゥットガルト版を補完する新しい史的批判版としてフランクフルト版（*Frankfurter Hölderlin-Ausgabe* 略称 FHA）の刊行をスタートさせ、センセーションを巻き起こした。ザットラーは、ヘルダーリンの「狂気（Wahnsinn）」とは「真の意味（Wahr-sinn）」にほかならず、「人間の最高の財産の根源」であるとして、ヘルダーリンのテクストが持つ謎や不可解さの中に創造的・批判的な契機を見ようとする[53]。ザットラーは、完成稿という観念は「自己欺瞞の産物」にすぎないとし[54]、文学テクストが完成稿へ向かって目的論的に発展すると考えるバイスナーの生成モデルを批判し、テクストを完成稿と異稿という2つのカテゴリーに区分する二分法的思考を放棄した編集方針を取った[55]。またフランクフルト版は、テクスト生成を空間と時間という2つの位相で捉え、ヘルダーリンの手稿空間を写真とその写実的転写を通じて提示するとともに、手稿の時間的な変化のプロセスを独自の解釈で再構成することも行っている[56]。ザットラーによれば、シュトゥットガルト版までの史的批判版においては、権威としての編者に読者が全面的に依存し、編者が自身の編集と解釈を読者に一方向的に提示していたとされる。それに対し、フランクフルト版は、読者の編者に対する依存関係を断ち切り、読者自身がテクストを自立的に編集することを可能にするという[57]。

フランクフルト版の刊行によって、シュトゥットガルト版がヘルダーリン研究において従来持っていた規範的な力は弱まったといえる。しかし、フランクフルト版は、手稿空間の再現のために導入された資料編のシステムが非常に複雑で、概観可能性という点で難があり、熟練したヘルダーリン研究者以外は使いこなすことが困難であると思われ

53 Sattler: Friedrich Hölderlin „Frankfurter Ausgabe“ (1975/77), S. 112.
54 A. a. O., S. 118.
55 A. a. O., S. 116.
56 A. a. O., S. 126ff.
57 A. a. O., S. 118f., 125, 128f.

る。バイスナーの文学テクストの生成モデルが古典主義的な理念形にすぎないとしても、シュトゥットガルト版はその文献学的水準の高さと資料編の明瞭性から、テクスト解釈のたたき台として今後も参照することが不可欠な全集であり続けるに違いない。これからのヘルダーリン研究者は、シュトゥットガルト版を解釈のたたき台としつつも、フランクフルト版をはじめとする複数の版を参照することによって、自身でテクストの生成プロセスを再構成することが求められるだろう。

参考文献

I.

Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke. Große Stuttgarter Ausgabe. Hrsg. von Friedrich Beißner, Adolf Beck und Ute Oelmann. 8 Bde. Stuttgart (W. Kohlhammer / J. G. Cotta) 1943-1985 (zit. als StA).

Ders.: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Unter Mitarbeit von Friedrich Seebass. Hrsg. von Norbert von Hellingrath. 6. Bde. München / Leipzig (G. Müller) 1913-1923 (zit. als Hellingrath).

Ders.: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914-1926. Werkteil Gedichte. Lesarten und Erläuterungen mit dem Text (Teil 1: Herausgeberbericht, Teil 2: Edition [auf CD-ROM]). Hrsg. von Hans Gerhard Steimer. Göttingen (Wallstein) 2019 (zit. als Zinkernagel).

Ders.: Sämtliche Werke. »Frankfurter Ausgabe«. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. von Dietrich E. Sattler u. a. Basel /Frankfurt a. M. (Stroemfeld / Roter Stern)1975-2008 (zit. als FHA).

II.

Allemann, Beda: Hölderlin und Heidegger. Zürich / Freiburg i. B. (Atlantis) 1954.［邦訳：ベーダ・アレマン（小磯仁訳）『ヘルダリーンとハイデガー』（国文社）1980］

Barner, Wilfried: Die Attraktivität der Theorie-Skepsis. Friedrich Beißners Vorlesungen zur Poetik. In: Strukturalismus in Deutschland. Literatur- und Sprachwissenschaft 1910-1975. Hrsg. von Hans-Harald Müller et al. Göttingen (Wallstein) 2010, S. 273-297.

Beißner, Friedrich: Bedingungen und Möglichkeiten der Stuttgarter Ausgabe. In: Die Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Ein Arbeitsbericht. Hrsg. im Auftrag des Württ. Kultministeriums vom Vorsitzenden des Verwaltungsausschusses der Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe Ministerialrat Theophil Frey. Stuttgart (J. G. Cotta) 1942, S. 18-30.

Ders.: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. In: Ders.: Reden und Aussätze. Weimar (Böhlau) 1961, S. 251-265.

Ders.: Der Erzähler Franz Kafka. In: Ders.: Der Erzähler Franz Kafka und andere Vorträge.

Mit einer Einführung von Werner Keller. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1983, S. 19-54.

Ders.: Editionsmethoden der neueren deutschen Philologie. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 83, 1964, Sonderheft zur Tagung der deutschen Hochschulgermanisten vom 27. bis 31. Oktober 1963 in Bonn, S. 72-95.

Bothe, Henning: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos". Die Rezeption Hölderlins von ihren Anfängen bis zu Stefan George. Stuttgart (J. B. Metzler) 1992.

Dilthey, Wilhelm: Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie. In: Ders.: Gesammelte Schriften. Bd. 5, Leipzig (B. G. Teubner) 1924, S. 139-240.

Goethe, Johann Wolfgang: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. 40 Bde. Hrsg von Hendrik Brius u. a. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 1987-2013.

Heidegger, Martin: »Wie wenn am Feiertage...«. In: Ders. Gesamtausgabe. 1. Abt.: Veröffentlichte Schriften 1910-1976, Bd. 4. Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung. Frankfurt a. M. (V. Klostermann) 1981, S. 49-77.［邦訳：マルティン・ハイデッガー「あたかも祝日のように……」〔ハイデッガー全集 第4巻（濱田恂子／イーリス・ブフハイム訳）『ヘルダーリンの詩作の解明』（創文社）1997, 67-107頁〕］

Metzger, Stefan / Kreuzer, Johann: Editionen. In: J. Kreuzer (Hrsg.): Hölderlin-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung. 2. Aufl. Stuttgart/Weimar (J. B. Metzler) 2020, S. 3-14.

Nutt-Kofoth, Rüdiger: Friedrich Beißner. Edition und Interpretation zwischen Positivismus, Geistesgeschichte und Textimmanenz. In: Neugermanistische Editoren im Wissenschaftskontext. Hrsg. von Roland S. Kamzelak / Rüdiger Nutt-Kofoth / Bodo Plachta. Berlin / Boston（De Gruyter）2011, S. 191-217.

Landmann, Georg Peter (Hrsg.): Der George-Kreis. Eine Auswahl aus seinen Schriften. Stuttgart (Klett-Cotta) 1980.

Lange, Wilhelm: Hölderlin. Eine Pathographie. Stuttgart (F. Enke) 1909.［邦訳：ランゲ-アイヒバウム（西丸四方訳）『ヘルダリン―病跡学的考察』（みすず書房）1989］

Oellers, Norbert: Friedrich Beißner (1905-1977) In: Wissenschaftsgeschichte der Germanistik in Porträts. Hrsg. von Christoph König / Hans-Harald Müller / Werner Röcke. Berlin / New York (De Gruyter) 2000, S. 228-234.

大田浩司「『固い結合』の美学―ヘリングラートによるヘルダーリンの再評価と文学的モデルネ」〔日本独文学会研究叢書146号『「詩人たちの時代」の終わり？―ヘルダーリン、ツェラン、そしてバディウ』2021, 54-74頁〕

Ota, Koji: Hölderlin-Renaissance und Paradigmenwechsel der Literaturwissenschaft im frühen 20. Jahrhundert. In: Wissen über Wissenschaft. Felder - Formation - Mutation. Festschrift für Ryozo Maeda zum 65. Geburtstag. Hrsg. von Manshu Ide et al. (Stauffenburg) 2021, S. 139-156.

Plachta, Bodo: Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition. Stuttgart (A. Hiersemann) 2020.

Reitani, Luigi: Die Entdeckung der Poesie. Norbert von Hellingraths bahnbrechende Edition der Werke Hölderlins. In: Neugermanistische Editoren im Wissenschaftskontext. Hrsg. von

Roland S. Kamzelak / Rüdiger Nutt-Kofoth / Bodo Plachta. Berlin / Boston（De Gruyter）2011, S. 153-165.

Sattler, D. E.: Friedrich Hölderlin „Frankfurter Ausgabe“. Editionsprinzipien und Editionsmodell. In: Hölderlin-Jahrbuch (=HJb) 19/20 (1975/77), S. 112-130.

Szondi, Peter: Über philologische Erkenntnis. In: Ders.: Schriften I. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1978, S. 263-286.［邦訳：ペーター・ソンディ「文献学的認識について」〔ペーター・ソンディ（ヘルダーリン研究会訳）『ヘルダーリン研究―文献学的認識についての論考を付す』（法政大学出版局）2009, 1-29頁〕］

Zinkernagel, Franz: Die Entwickungsgeschichte von Hölderlins Hyperion. Straßburg (K. J. Trübner) 1907.

The Poem as a Growing Organism:
Beißner and the Stuttgart Edition

Koji OTA

The purpose of this paper is to examine the possibilities and limitations of the Stuttgart edition (Die Große Stuttgarter Ausgabe) of Friedrich Hölderlin's (1770-1843) works by Friedrich Beißner (1905-1977). Beißner edited the Stuttgart edition with the intention of replacing the editions of Norbert von Hellingrath (1888-1916) and Franz von Zinkernagel (1878-1935).

Hellingrath was influenced by the aesthetic of Stefan George (1868-1933) and highly admired Hölderlin's late poems, which were generally considered products of madness. Beißner also appreciated Hölderlin's late poetry, but he tried to eliminate the interference of all literary and aesthetic theories from his editorial works.

Beißner highly valued the philological perfection of the edition by Zinkernagel. However, Beißner argued that Zinkernagel's presentation of the generative processes of literary texts had a major disadvantage in terms of clarity. The Stuttgart edition succeeded in visually and clearly reconstructing the diachronic development process of literary texts using an innovative method called the "staircase model" (Treppenmodell).

Beißner believed that a poem has "seed words" (Keimwörter) that represent the prototype of its concept, and that the poem grows organically from the "seed words" and develops into its completed form. Here we can discern the significant influence of Johann Wolfgang von Goethe's (1740-1843) natural philosophy and classical aesthetics on Beißner.

It is clear that Beißner's edition is subject to much criticism. For example, Beda Allemann (1926-1991) and Peter Szondi (1929-1971) criticized Beißner's positivist attitude in his text editing and argued that literary texts appear as unique events that cannot be reduced to general laws of natural science. And D. E. Sattler (1939-) criticized Beißner's teleological concept, and in his Frankfurt edition adopted an editorial policy that abandoned the dichotomous thinking that divided the text into two categories: final version and its variants.